

教育と文化

No.108

平成27年7月1日
公益財団法人
愛知教育文化振興会
岡崎市明大寺町字馬場東62番地
電話 0564-51-4819

子どもは教師を映す鏡？

公益財団法人愛知教育文化振興会 理事長 河合智仁



「自分の言葉やおこないが弟子たちにとのよう結果をおよぼすか、分かんもんは人の師足りえん。お前は最早『先生』と呼ばれるに値せん」

大河ドラマ「花燃ゆ」の中で、老中間部詮勝の暗殺を企て、松下村塾の塾生たちを扇動する吉田寅次郎に向かって小田村伊之助が言い放った言葉である。この言葉が妙に心に残った。

子どもの規範意識の低下が叫ばれて久しい。しかし、本当に子どもたちの規範意識は低下しているのだろうかとよく思

う。学校における子どもたちの姿や言動からは、規範意識の低下を実感として感じることはあまりない。確かに、ルール違反やマナー違反をしかず子ども、いじめや不登校傾向など気になる子どもはいる。問題行動が全く起こらないわけでもないが、これらの学校の現状や目の前の子どもたちの姿から、規範意識が低下しているとはなかなか考えにくいと感じている。

しかし、最近、新聞、テレビなどで青少年のかかわる痛ましい事件が数多く報道されることも確かである。もちろん問題行動を起こす少年はごく一部のものがあり、特異な事案であると思いたい。このような事件が後を絶たないことは至極残念である。これらの事件の背景として、社会の基本的なルールを守ろうとする意識の希薄化や自己中心的で、欲望や衝動を抑えられない子どもの増加が指摘

されている。大人から子どもへと伝えられてきた規範意識の回復だけでなく、これからの次代を担う青少年の規範意識をしっかりと育てていかなければならない。よく、「子どもは社会を映す鏡」といった言葉を耳にする。子どもたちは、学校・家庭・地域社会など、周りの様々な環境の影響を受けて成長し、人格を形成していく。特に、規範に対する意識の形成にはモデルが必要だと言われている。親の模倣に始まり、その後は本人の成長に伴い、所属する様々な集団での社会生活を通して新たな規範を獲得していく。将来を担う子どもたちの規範意識や公共心を向上させるためには、まず手本となる親が、そして周りの大人が時代に応じた的確な規範意識を持つことが重要である。そして、学校・家庭・地域が連携し、「ルールやマナーを守ること」「他人と共により良く生きるための人間関係を身に付けること」などの社会規範を子どもたちに育んでいくことが必要だと痛感している。

子どもたちの成長の過程において、人格を形成する大事な小中学校での9年間。規範意識について学び、身に付ける重要な場の一つが学校であり、子どもたちの手本となる大人の代表の一人は教師であるといっても過言ではない。もちろん、基盤は親であり、家庭であり、地域であることは間違いないことであり、忘れてはならないが、

規範意識は模倣から始まる。だからこ

そ、子どもの手本となる大人でありたい。とりわけ、日々子どもを支援し、指導する教師は手本でありたい。「子どもは教師を映す鏡」と言ったら言い過ぎだろうか。子どもの規範意識の形成に、子どもにとって最も身近な大人の一人である「先生」の言動、生き様、姿勢には大きな影響力が無い訳はないのだから。

もくじ

巻頭言

子どもは教師を映す鏡？

河合 智仁

三河教育への提言

自由と選択ーアメリカ教育事情ー

杉山 春記

三河の文化を訪ねて

立行司 二十六代 木村庄之助

山田 富久

平成二十七年年度研究発表表校一覧

平成二十七年年度版刊行物の紹介

作文の友・中学生の学級活動

平成二十六年年度最優秀論文

天野 千佳

教室の窓辺

松永 康史・堂地 志帆

平成二十七年年度学校教育ボランティアグループ助成

学校教育ボランティアグループ活動紹介

行事予定

編集後記

自由と選択 ―アメリカ教育事情―

安城市教育委員会教育長 杉山春記



一 はじめに

昨年、機会あってアメリカ・ハンチントンビーチ市を訪れました。海外のいろいろなことに触れることは、日本を知ることであり、さらに、自分自身を見つめる機会でもありました。カリフォルニア州に位置するハンチントンビーチ市は安城市と姉妹提携を結んでいる市であり、毎年、互いに交換学生の派遣を続けています。安城市からは中学三年生が、ハンチントンビーチ市からは高校生が、互いにホームステイをしながら交流を深めています。

今回は、三月にチェリーブロッサム・フェスティバル（桜祭り）を開催するというところで、そのご招待を受けたものでした。せっかくの機会でしたので、小学校、中学校、高校を訪問し、アメリカの教育事情も視察させていただきました。

二 アメリカの教育

教育制度があまりにも違うので、理解するまでにかなり時間を要しました。「州」によっても教育事情は大きく異なりますが、視察したカリフォルニア州の中は五つの「郡」に区分され、さらに、郡の中はいくつかの「学区」に分けられています。ハンチントンビーチ市はそのうちの三つの学区が重なっています。ハンチントンビーチ市の多くの面積をカバーする一つの学区と、さらに隣りの市も含めて決められている学区が二つあります。この学区の裁量権は実には大きく、使用する教科書やカリキュラム、始業日から終業日、あげくは小学校から

高校までの学制にいたるまで決定権を持つています。中央政府が大きな力を持つ我が国とは違い、地方分権そのものです。当初、訪問したハンチントンビーチ市全体の教育を知ろうとやっきになっていましたが、実はそれは存在しないということがやっとわかりました。これまでの固定観念というものが、いかに思考の妨げになっているか痛感しました。市という行政区分と、学区はまったく一致しないのです。私たちは、市として様々な教育施策を考えますが、ここでは市と学区とはエリアが違うので、市としての施策もありませんし、市としての統計も取りようがないというのが実情です。私たちは、発想が根本的に大きく異なっています。学区の中には地域住民の直接選挙で選ばれた五人の教育委員がいます。業績がよくなければすぐ落選するそうです。それほど地域住民は学校教育に関心が高いということです。それは、地域住民が納める固定資産税が教育費に充てられているという背景があるからで、自分たちが支払った税金の使途に高い関心を持っているということだそうです。さらに驚くことに、学校の質と、地域の住宅の不動産価格が比例しているというのです。学校ごとの成績が公表されると、子どもをもつ親は、より質の高い学

校のある地域の住宅を買い求めようとしています。その結果、住宅価格が上がるというものです。こうした事情があるからこそ、学区によってはかなり大きな格差が生じているとのことでした。ここハンチントンビーチ市は、その意味では実に豊かな暮らしをしている人々が多いことが察知できました。

一般的にアメリカ人はライフスタイルに合わせて、一生涯の間に五回は転居するとのこと、たまげてしまいます。「ふるさと」の山に向かいて言うことなし、ふるさとの山はありがたきかな（啄木）」、そんな情緒は通じないのでしょうか。

学区の五人の教育委員は、別に一人の教育長を雇用し、その下に何人かの事務局（アシスタント）がいます。人事も予算もここが担っているとのことでした。

三 アメリカの学校

小学校は日本の幼稚園年長から五年生まで、中学校は六年生から中学二年生まで、高校は中学三年生から高校三年生までです。ここまでは義務教育ということになります。

小学校は担任制ですが、中学・高校は担任制ではなく、学級もあります。子どもが授業を選択し、指定された教室へ行つて授業を受けるといふものです。日本の大学と同じです。何を履修するかは、

校内にいるカウンセラーと相談して決定します。すでに中学校段階から個を重視し、時間割は生徒一人ひとりが違うという事です。個に応じた選択の自由が十分保障されています。そして、能力主義は徹底され「飛び級」も当たり前です。

学級集団の中の所属感とか、帰属意識とか、居場所づくりといったことはまったく無縁です。授業の始まりや終わりにあいさつありません。黒板やチョークもありません。学校からの連絡は、学級という組織がないので、直接学校から郵送やEメールで連絡するそうです。校内には、あちらこちらから「自由」という空気が流れているのを感じました。

高校にもなると、女の子は化粧をし、制服などはありませんので随分大人びて見えます。高校生は、その多くが自家用車で通学し、校内には広い駐車場も完備されています。これが大国アメリカの姿です。

私たちは、学習指導はもちろんですが、それ以外にも生徒指導、進路指導、部活動をはじめ、多様化する保護者対応等々、実に多くの業務を抱えています。しかし、アメリカの教員は、教えることだけです。例えば、子どもが授業中に騒いだり、他人に迷惑を及ぼしたりした時には、教員はその子どもを校長のところへ送るそうです。そして、校長が、子どもから話を聞いたたり、注意をしたりするそうです。

さらに、いわゆる生徒指導上のトラブルを起こすと、別の機関に送られ、そこで教育されるそうです。したがって、訪問した中学校も高校も、生徒指導上の課題についての緊迫感はまったく伝わってきませんでした。ただ、中学校の廊下にはやたら「薬物乱用防止」のポスターが張ってあったのが印象的でした。

アメリカの教員の雇用のベースは学区単位の契約です。いったん採用されると定年までという日本とは大きく異なります。校長は公募制です。訪問した三人の比較的若い校長は、いずれも自校が〇〇賞に輝いたこと、〇〇に認定されていることを声高にアピールしていました。学習面で実績を上げることが、校長にとって大きな使命のようでした。

四 アメリカの授業

どの校種の学校も、学力をつけること、成績を上げることが何よりも大きな使命だと考えているようでした。ICTをふんだんに活用した授業もたくさん見ました。

まず、小学校三年生では、電子オルガンを弾きながら音符の長さを使って量を体感させるという算数、五年生では一人一台のタブレットで調べ学習。電子オルガンもタブレットも保護者からの寄付金でまかなっているとのことでした。こうした寄付について、案内してくれた校長

の「保護者は学校に協力的だ」という言葉が印象的でした。

中学校二年生も、一人一台のパソコンで本の感想をまとめていました。三年生は、フォトショップというソフトでブックカバーをデザインしていました。会話もなく、黙々と画面と格闘する子どもたちに敬服しました。体育では体力測定のようなことを行っていました。結果はすぐにタブレットに記録され、校舎掲示板にランキングがリアルタイムで表示されていました。

高校では、選択教科が授業の中心でした。3Dプリンターソフトの製作や、リモコンカーの製作、また、プロ使用のスタジオや編集機器もが完備し、卒業生は各界で大いなる活躍をしているとのことでした。ギターやポップミュージックを教える音楽では、アップル社認定の指導者もいるそうです。この高校でも、保護者からの寄付金でパソコン八百台、テレビカメラ、編集機器等をそろえたと聞きました。

教師が教室の前面に立って進行していく授業スタイルは、ほとんど見かけませんでした。教科書中心から生活経験重視へ、記憶中心から問題解決力重視へ、また、教師中心から学習者重視へという、かつてのアメリカの哲学者「デューイ」が唱えた経験主義教育を彷彿とさせるものがありました。

五 おわりに

アメリカの教育は、今回視察したような公立学校だけでなく、私立学校やその他の学校もあります。市場経済の考え方が根強いのか、悪いものは自然に淘汰されて良いものが残る、という原理が重視されているような気がします。そのために、「自由」と「選択」という価値が極めて重視され、教育の世界でも大きな影響力と、その位置づけがなされていると感じました。

しかし、それにしても多くのアメリカ人特有の明快な自己主張力、流暢なコミュニケーション力はどこで培われているのでしょうか。今回の視察では推測できませんでしたが、もっと奥深いものが根底にあるのかもしれない。

日本とはあまりにも大きく異なるアメリカの教育事情を垣間見て、改めて三河教育を振り返る機会となりました。ここ三河では、強固な研究組織が確立し、互いに切磋琢磨しながら授業改善を目指し、授業研究には労力を惜しみません。改めて、今私たちが大切にしなければならぬことが見えてきたように思えます。最後に、三河教育への提言とはあまりにもかけ離れた内容になってしまったこととお詫びいたします。